



ささへるニュース

Vol.6
2014年 冬

だれもが輝く明日へ



Sasakawa Memorial
Health Foundation
笹川記念保健協力財団



特集 日本財団ホスピスナーズ研修会 in 東北 開催報告

ひろがる ハンセン病の歴史保存の動き

ホスピスドクター研修ネットワーク第10回情報交換会開催報告

財団設立40周年を迎えて

2015年度「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業 受講者募集

マンスリーサポーターを募集しています

日本財団ホスピスナース研修会 in 東北 開催報告

今年は被災地復興の意味も込め、ナース研修会の地方開催を東北で行いました。仙台では手島先生の講演、ランチョンセミナーと事例検討会を、南三陸町では、被災者の声を聞く講演会と現地視察を行いました。

テーマ 「今、看護師だからできること～拡大する看護の力」

場所 仙台、南三陸町

開催日 2014年9月27日～28日

参加者 83名

1日目講演

「今、看護師だからできること～働く意味の見つけ方」

講師 手島恵 (千葉大学大学院看護学研究科 教授)



講師 手島恵先生

看護師のありかた

これからの医療は、地域で始まり地域で亡くなるということに対応しなくてはならないと、厚労省法案にも書かれています。医学の進歩により、5年、10年とさまざまな経過を経て病人が亡くなるそのプロセスをどう支えるかが大事になっている中で、少子化による人口減少が急激に進み、医療職の偏在や不足が益々深刻化していくと予測されています。先進諸国の看護師の平均年齢は40歳を超え、アメリカに至っては退職年齢がありません。これからは60歳で定年ではなく、60歳以上でも働き続ける、続けられる職場作りが大事だと思います。皆さんも60歳で辞めるのではなく、そこから先のキャリアをどう描いていくかを是非考えていただきたいです。

ポジティブとは

悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意志によるものである。これはフランスの哲学者アランの「幸福論」の中の文章です。楽観的に物事を見るには自分を律しなければなりません。楽しいからとか物が豊かだからそのように見えるのではなく、崖っぷちの時にこそ、

どう前向きに、肯定的に物事を見るかということだと思います。高いプロ意識を持ち、物事を異なる側面から見ると、違った答えが出てくるのではないのでしょうか。

グローバル社会に必須なもの

多様な価値観を持つ人が共に働く時代に、何が大事なのかということを見可視化し共有することで、仕事をやり遂げる力や、組織に対する忠誠心が高まり、倫理的行動が促進され、組織の一員であることに誇りを感じ、チームワークや団結心が生まれるのです。これからの医療、特にホスピスケアでは、ボランティアなどさまざまな人々とともに仕事をします。グローバル化する社会において、異なる考えを持つ人々をつなげるツールとして礼節は必須であり、ケアにおいても特に大事です。

変えること、変えてはいけないこと

私は、1993年笹川医学医療研究財団の助成を得て「認知症のある高齢者の興奮行動を緩和するための手のマッサージ効果」というテーマで、1年間アメリカで研

究しました。初めは、看護助手の人にビデオを見せてマッサージができるよう訓練し、時間がきたら指定された患者さんの手をマッサージしてもらいましたが、それでは効果を示しませんでした。そこで私たちは、専属の人によるマッサージを15日間連続して行い、呼吸数や脈拍などを測ったところ、リラクスの効果が確認されました。ただ言われたから行うマッサージと、一生懸命心を込めて行うマッサージは違う、ということも研究として示せたならもっと面白おもしろかったのにならぬと思います。

2日目講演

3.11を経験した看護職の講演

翌日は、東日本大震災を経験した3名の看護師を迎え講演と鼎談を行いました。

尾形妙子仙石病院看護部長は、震災で3人のご家族を亡くされました。ご自身の経験から「感情を吐露できる環境を整えること」が大切であること、支援者は「遺族の心の深淵を他者が理解することはできない」ということを分かった上で、相手に良い変化を求めるのではなく、現実を受け入れる過程を同伴者として見守るのが良いのではと話されました。

津波で4階病棟まで浸水し、多くの患者を喪った公立志津川病院の星愛子看護部長は、医療器具も薬もなく、寒冷の中でカーテンや紙おむつ、段ボールで寒さをしのぎ、自衛隊の救助を待ったことや、避難所での看護活動についてお話しくださいました。

石巻赤十字病院は、ほとんどの医療施設が機能を失った石巻圏内の中で唯一機能する災害拠点病院として、

最近、医師の触診が減ったと言う話を耳にします。大勢の患者さんを早く診察するために、画像を見て早くさばくというのは医師にも気の毒な状況だと思います。だからこそ、私たち看護師は触れて看る、ふれあい絆を結び、患者さんが安心できるようなパートナーシップを保っていかなければ、患者さんは不安なままで時間を過ごすことになるのではないかと思います。変えていいこと、変えてはいけないことをよく峻別することがこれからの社会で大事なことだと思います。

搬送されてくる全ての患者を受け入れました。金愛子副院長兼看護部長は、震災後すぐに対策本部が設置され、約1時間後には1階玄関でトリアージの受け入れができる準備が整ったことなど、被災病院での医療活動についてお話しくださいました。

日本モーターボート選手会ご一同の参加

今回の研修会では、現在も被災地の宮城県石巻市狐崎浜でのボランティア活動を継続中の日本モーターボート選手会から、佐野隆仁専務理事、大畑克総務部長、女性ボートレーサーの田村美和選手の参加を得ました。懇親会では、研修会がボートレースからのご支援で支えられていることを実感したナースとご一同の交流が広がりました。選手会から被災地南三陸町の子供達に鉛筆のプレゼントがなされ、佐藤仁町長が御礼を述べられました。



事例検討会の様子



被災者による講演



選手会からの鉛筆贈呈

ひろがる ハンセン病の歴史保存の動き

1980年代の治療法の確立以降、全世界で精力的に展開された対策活動により、ハンセン病の状況は大きく進展しました。しかし華々しい科学の勝利の一方で、ハンセン病は「終わった問題」として、その歴史は急速に忘れられつつあります。そのような中、歴史保存の動きが広がり始めています。

変化するハンセン病の世界

最も古い感染症の一つであるハンセン病は、その長い歴史を通し、世界各地で恐れられてきました。ハンセン病にかかった人はその病気のために、生きる場、手段を奪われ、偏見や差別は家族にも及びました。

1980年代の有効なハンセン病治療法の確立、世界レベルでの制圧目標の決定、治療に必要な薬剤の無償配布により、登録患者数は大きく減少しました。その一方で、ハンセン病は「終わった問題」として認識されるようになり、病気と共に生きた人々の歴史、治療に尽くした人々の歴史、ハンセン病をめぐる当事者・家族・社会の歴史は急速に忘れ去られつつあります。

なぜハンセン病の歴史を残すのか

「辛い過去は忘れない」、「何十年もたって社会も病気のことを忘れて、差別がなくなってきたところだ。いまさら社会の人に問題を思い出させないでほしい」。さまざまな国でハンセン病の歴史を残そうとする人たちが耳にしてきた言葉です。

なぜハンセン病の歴史を残すのか。

病気のために差別した過去の過ちを忘れないため、医学や科学のさらなる発展のため、病気と共に生きた当事者の思いを語り継ぐため、さまざまな「問題」を持つ人々が共に生きる社会の実現に活かすためなど、理由は多くあります。

日本では1970年代から、療養所入所者が史料を集め、1977年、多磨全生園の一角に、ハンセン病図書館が開館されました。この図書館に集められた資料の多くは、現在の国立ハンセン病資料館に引き継がれ、病気を体験した人たち自身による「自分たちの生きた証」である歴史を語り継いでいます。

第1回国際ハンセン病歴史保存ワークショップ

笹川記念保健協力財団と国立ハンセン病資料館は、ブラジル、マレーシア、フィリピン、台湾からの参加者と、オーストラリアの講師を招き、2012年10月第1回国際ハンセン病歴史保存ワークショップを開催しました。



国立ハンセン病資料館を見学するブラジルからの参加者

第1回ワークショップ終了後に大きな動きがあったのは、フィリピンでした。当事者ネットワーク、国家歴史委員会、国立公文書館、国立療養所、保健省が協力体制を築き、国レベルでの歴史調査と、各療養所における保存活動を開始したのです。

第2回ワークショップ

開催から2年がたった本年10月末に、タイ、ネパール、マレーシア、コロンビアからの参加者に加え、前回ワークショップ開催後に歴史保存が大きく展開したフィリピンから講師を招き、第2回国際ハンセン病歴史保存ワークショップを開催しました。

すでに自国にてなんらかの歴史保存活動を開始しているか、現実的な計画がすでに立てられており、準備を開始している参加者による今回のワークショップでは、日本

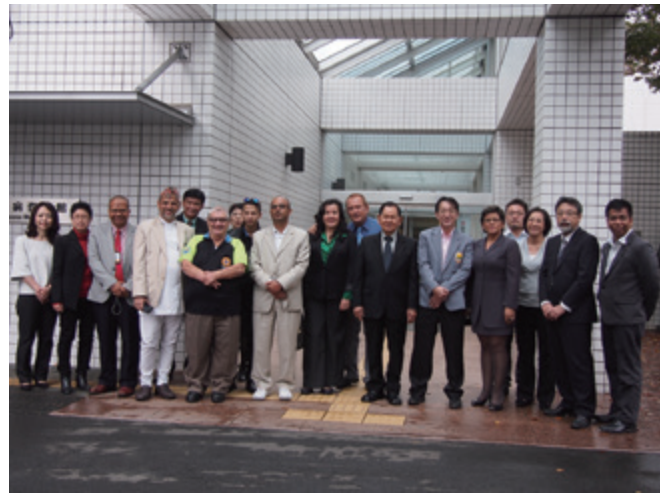
とフィリピンの経験共有の後に、各国の現状と保存計画の発表を受け、その後に参加者全員で各国の保存計画について検討しました。

これから

第2回ワークショップは、特にネパールのように現在でも多くのハンセン病患者をかかえる国においては、歴史が過去の問題ではなく、現在の保健問題への注意を喚起する役割も担うことが確認されるなど、新しい学びもありました。

ワークショップで出された提言は次の通りです。

- *世界各国でハンセン病歴史保存に取り組む人々のネットワークの立ち上げ
- *歴史保存の取り組み共有の場／ツールの確保
- *専門技術・知識の共有
- *歴史保存に関する予算の確保
- *各国の歴史保存計画見直し
- *歴史保存に必要な国内外諸機関との関係構築
- *第1回・第2回国際ハンセン病歴史保存ワークショップ参加者による、世界歴史保存宣言の発表
- *世界ハンセン病の日での歴史保存の訴え



第2回国際ハンセン病歴史保存ワークショップ参加者

参加者の帰国後、コロンビアでは歴史保存委員会が組織され、活動計画を協議、タイではハンセン病ミュージアムを作るための関係者協議が開始、ネパールではワークショップの報告がされ、これから国レベルの歴史ワークショップが計画されるなど、ワークショップ終了後も参加者は熱心に活動を続けています。各国次回のワークショップまでの展開が待たれます。

「ハンセン病問題を語り継ぐもの」講演会のお知らせ

2015年2月中旬に、マレーシア、中国、日本の語り手を招き、ハンセン病問題のこれからを考える講演会を開催します！

講演会日程

2月18日(水) 大阪府茨木市追手門学院大学
2月20日(金) 鹿児島県鹿屋市リナシティかのや
2月22日(日) TKP 新宿ビジネスセンター
(詳細は当財団ホームページ掲載予定です)

いま世界では

世界各地でハンセン病当事者の高齢化が進みつつある中、当事者の子どもにあたる第2世代や、一般の大学生、支援者グループ等が、当事者と共にハンセン病問題を語り継ぐ存在として活動を始めています。マレーシア、中国、日本の3カ国の、実際に活動する方からお話を伺い、これからのハンセン病問題のありかたを問いかけます。

マレーシアでは

療養所に生まれた子どもを所内で育てることが許されず、親子の絆が断ち切れ数十年がたった現在、絆の修復を含め、第2世代が立ち上がり始めています。



家族との再会を支援しているジャーナリストのイーニー タン氏(右)と第2世代のノラエニ モハメド氏(左)

ホスピスドクター研修ネットワーク第10回情報交換会開催報告

今回で10回目を迎えた「ホスピスドクター研修ネットワーク情報交換会」は、本研修を終了され現場で活躍されている5名の方を講師にお迎えしました。全国より18名のドクターが集合し、講演、質疑を通して意見交換を実施、「緩和ケアの原点」を再確認し合う機会となりました。10年を記念し本交換会発足当初より、世話人として活動を支えて指導くださっている石巻静代先生のメッセージをご紹介します。

日時 2014年11月15日(土) 13:00～17:00

場所 日本財団ビル

ホスピスドクター研修ネットワーク 第10回情報交換会を終えて

笹川記念保健協力財団の助成による「ホスピス緩和ケアドクター研修」修了者と、受け入れ施設の指導医師を対象とした「ホスピスドクター研修ネットワーク」情報交換会は、2005年度より年1回の開催を重ね今年で10回目を迎えました。今回は「ホスピス緩和ケア 私の実践」をテーマとして、研修修了者5名の先生方(栗山先生、高藤先生、荒木先生、船木先生、木村先生)に講演をお願いしました。

演者の先生方は、病院、緩和ケア病棟、在宅、と活躍するフィールドは異なりますが、より良いホスピス緩和ケアの展開を目指した自施設・地域での取り組みや今後の抱負、また悩み葛藤した経験や戸惑いを感じていることなども交え、ホスピス緩和ケア医としての歩み、弛みない想いをお話してくださいました。真剣な中にも時に笑いも誘われ終始和やかな雰囲気にも包まれた会場では、参加者一人一人が自身の経験を重ね合わせながら話に聞き入り、意見を交し、私たちの原点であるホスピスケアについて振り返る時間を共有できたと思います。

日常診療の現場で日々抱えているさまざまな想いを共に語り、分かち合うことができた今回の情報交換会を終えて、このネットワークは、全国で活躍する会員が互いに支え合い築いている大きなチームであるように感じました。年1回の情報交換会は、そのチームメンバーがそれぞれの経験を持ち寄り、帰ってくる「ホーム」となるのではないのでしょうか。今後もさらにネットワークが活かされ、ホームに集い、このチームを皆で大きく育てていくことができるように願っています。

(ケアタウン小平クリニック 石巻 静代)



世話人 石巻静代先生



ディスカッションの様子

財団設立40周年を迎えて

財団は、1974年5月4日の設立から40年目の節目を迎えました。10月17日には財団ゆかりの多数の方々と、一般の参加者も交え、和やかな雰囲気の中、日本財団ビルにおいて記念の講演会と感謝の集いをもちました。



日本財団 笹川会長の特別講演



紀伊國会長の記念講演。写真を交えつつ40人の方のエピソードを紹介

40周年記念講演会

開会に際し、理事長喜多悦子より、これまで40年の長きにわたる関係者への謝意を述べました。この中で、財団設立者笹川良一初代会長と石館守三初代理事長によるハンセン病への取り組みは、現在でいう「人間の安全保障」への壮大な取り組みであり、財団誕生当時の発病者毎年数百万以上の時代に比べ、現在の20万人余は、一見、公衆衛生上の問題としての解決は達成されたかに見える経過を述べました。しかし、多数国では、貧困や低開発と関連したこの病気の制圧は程遠い上、病気をめぐる差別や偏見といった社会的問題解決は、むしろ緒に就いたばかりであり、節目の年に、再度、再々度、財団創設の所以である目標を思い、改めて、一層の努力をお約束すると挨拶しました。続いて、ジュネーブより駆けつけてくださったWHO事務局長補 中谷比呂樹先生から、マーガレット・チャンWHO事務局長のメッセージとともに、ご自身からのお祝いのお言葉もいただきました。

講演は、2部構成で、まず、会長紀伊國献三から、「財団40年をふりかえって わが師 わが友」との題で、笹川良一初代会長、歴代WHO事務局長や地域事務局長、またエリザベス・テラーなど、40周年に因む40人の方々とのエピソードを紹介しました。続いて、WHOハンセン病制圧大使 笹川陽平日本財団会長より、「笹川記念保健協力財団におけるハンセン病との闘い」と題する特別講演をいただきました。会長は単に40年が経過したというのではなく、40年間で財団が成し得た内容の深さ、そして拡がりというものを評価すべきではないかとして、財団設立の目的であるハンセン病対策とともに、日本財団との協力の下に、財団が関与してきた、「日中笹川医学奨学金制度」、「チェルノブイリ医療協力」、「ホスピス緩和ケア発展のための取り組み」、また、新規事業「在宅看護センター起業家育成」など各事業にも触れられました。ご講演では会長の心にとまっているオスラー博士ら先達のお言葉などもご紹介いただきました。

感謝の集い

感謝の集いは、名誉会長日野原重明の挨拶でスタート。40年前、財団設立のきっかけとなった笹川良一初代会長と石館守三初代理事長との会合の場に同席された先生ならではの臨場感あふれる言葉で、その経緯が改めて明らかにされました。来賓ご祝辞は、日本看護協会坂本すが会長、乾杯のご発声は日本医学会高久史磨会長という、日本の医学と看護のそれぞれのトップのお言葉と励ましを頂戴しました。大変、光栄であり、一同、財団の目標達成に向けて一層の努力を続ける決意を新たにいたしました。これまで財団を支えてくださったみなさまに改めて感謝申し上げます。



日野原名誉会長の指揮のもと「Happyバースデー」を一同熱唱

2015年度

「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業 受講者募集

第2期生となる「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業の受講者を募集します。看護の力を活かし、誰もが安心して地域に住み続けることができる環境作りを共に目指す看護師の皆さんをお待ちしています。

当財団では2014年度より「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業を開始しました。この事業では、事業運営力、保健連携力、行政社会力、看護実践力を身に付けるための8か月間の研修を実施します。

高齢化が急速に進んでいる日本において、地域に根差した在宅看護事業所を運営・経営できる看護師を育成し、全国200か所に「日本財団在宅看護センター」を開設することが目標です。

助成応募締切 2015年1月30日(金)

応募方法 インターネット申請

詳細は財団ホームページよりhttp://www.smhf.or.jp/news_hospice/3818/ をご覧ください。



第1期生 講義の様子 (於：日本財団ビル)

マンスリーサポーターを募集しています

笹川記念保健協力財団では、さまざまな事業を安定して継続していくために、マンスリーサポーターを募集しています。みなさまのご支援をお願いいたします。クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただくことができます。

ご寄付いただく活動分野と口数をそれぞれお選びいただけます。

ハンセン病のない世界

ホスピス緩和ケア

公衆衛生の向上

クレジットカードで、毎月一定額を
自動的にご寄付いただけます

一口1,000円/月をお好きな口数で

2014年12月からの決裁システムの変更に伴い、一口1,000円より
お好きな口数で月々の支援額をお決めいただけることになりました

*寄付金額の変更、停止はいつでも自由になれます。当財団への寄付金は、税制上の優遇措置の対象となります。

詳しくは当財団の[ホームページ](#)→[ご支援ください](#)→[マンスリーサポーター](#) (<http://www.smhf.or.jp/>) をご覧ください。

笹川記念保健協力財団では、さまざまなメディアで情報を発信しています。

- ホームページ/理事長ブログ/ハンセン病対策事業部ブログ/ホスピス緩和ケア事業部ブログ/公衆衛生向上のための事業部ブログ
URL : <http://www.smhf.or.jp/> facebook : <https://www.facebook.com/smhf.tokyo>
- ニュースレター「チームささへるニュース」：年4回発行

チームささへるニュース Vol.6 2014年冬発行
発行元：公益財団法人 笹川記念保健協力財団
発行人：喜多 悦子
編集：チームささへるNL編集委員会

チームささへる事務局 (笹川記念保健協力財団内)
〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階
電話：03-6229-5377 (代表) FAX：03-6229-5388
EMAIL : smhf@tnfb.jp URL : <http://www.smhf.or.jp/>

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION